

令和 8 年 1 月 29 日

大阪市総合教育センター  
教育振興担当 実践研究グループ  
首席指導主事様

研究コース
<b>B グループ研究B</b>
校舎コード (代表者校舎の市費コード)
<b>671480</b>
選定番号
<b>B241</b>

代表者	校舎名:	北鶴橋小学校
	校舎長名:	川崎 菜穂子
	電話:	6741-6706
	事務職員名:	服部 朋美
申請者	校舎名:	北鶴橋小学校
	職名・名前:	主務教諭・藤本 かおり
	電話:	6741-6706

### 令和7年度 「がんばる先生支援」報告書

◇「がんばる先生支援」について、次のとおり報告します。

1	研究コース	コース名	B グループ研究B	研究年数	継続研究 (3年目)								
2	研究テーマ	個別最適な学びに向けた 教員の Collaborative learning ～通級指導教室担当教員のスキルアップと育成～											
3	研究目的	<p>1. 他校通級指導教室担当者のスキルアップにリーダー育成 ○外部研修への積極的参加による情報収集と Collaborative learning による学びの共有と深化 ○外部講師を招いての授業研究とその事例報告会</p> <p>2. 研修会のオープン化による通級指導教室担当者の育成 ○インクルーシブ教育推進室と連携したオープン研修を行い、通級指導教室の担当者を育成する</p> <p>3. 通級指導教室Virtual職員室の構築で連携を図り、働き方改革と授業力向上の両立につなげる ○Teamsを活用した開発教材の共有や情報共有を行うことにより、各校にわかれた通級指導教室担当者の連携を図る。</p>											
4	取り組んだ研究内容	<p>いつ、何のために、どのようなことを実施したのかを具体的に記載してください。(MSコシク 9.5※ イント)</p> <p>4月 【オンデマンド研究企画会】・研究テーマ、研究の進め方、見込まれる成果についての検討 ・年間計画の立案・アンケートの作成 【オンデマンド研究推進委員会】・研究テーマと年間計画の共通理解 ・通級指導教室Virtual職員室 (通級指導教室チーム) の作成と利用の共通理解 【外国にルーツをもつ児童への発達検査の可能性について～非言語による神経心理学的検査のバッテリー～】 日本LD学会でのポスター発表のためのデータ収集と検証、原稿作成</p> <p>6月 【第1回吃音グループ学習と保護者会】 ・通級指導教室に通う吃音の子どもたちとその保護者が交流した。</p> <p>7月 【オープン研修会開催】 (Teams共有) 『2Eの子どもたちの実際と支援の進め方』・発達障害と才能を併せもち、二重に特別なニーズがある子どもたちについて講演会を開催した。専門的な内容であるが多くの先生方に聞いてもらうことができた。 【第13回WISCV知能検査講習会参加】 (Teams共有) ・検査とアセスメントの専門性を深め、レポートにより内容をメンバーに共有した。</p> <p>8月 【第2回吃音グループ学習 オープン研修会】『吃音症の概要と子どもへの支援について』・吃音症について、保護者や教職員、学生を対象に講演会を行った。親の会の方の参加もあり、吃音についての実際の支援の仕方を知ってもらうことができた。 【神奈川LD夏のセミナー、SENS研修参加】 「WISCVの結果を学校現場で生かす」「教材スキルトレーニングを通して」 ・レポートによる研修内容の共有 (Teams共有)</p> <p>9月 【第6回SENS年次大会参加】・レポートによる研修内容の共有 (Teams共有)</p> <p>10月 【日本LD学会第34回大会参加】 ・ポスター発表『外国にルーツをもつ児童への発達検査の可能性について～非言語による神経心理学的検査のバッテリー～』・レポートによる研修内容の共有 【発達性ディスレクシア研究会参加】・レポートによる研修内容の共有 (Teams共有)</p> <p>12月 【第3回吃音グループ学習と保護者会】 ・通級指導教室に通う吃音の子どもたちとその保護者が交流した。</p> <p>1月 【研究報告会】 外国にルーツをもつ児童への発達検査の可能性について～非言語による神経心理学的検査のバッテリー～ ・外国にルーツをもつ子の課題の原因は、日本語のリミットなのか発達の特徴なのかについて検証し、講師による助言を受けた。オープン研修にすることで多くの先生方に聞いてもらえることができた。</p> <p>2月 【オンデマンド研究会 (まとめ)】 ・保護者アンケート、教員アンケート、オープン研修参加者アンケートの実施と分析 ・がんばる先生支援報告書作成・提出、実践交流と情報交換、伝達研修</p> <p>3月 ・次年度に向けて、本年度の成果と課題の共通理解</p>											
5	研究発表等の日程・場所・参加者数	<p>研究発表等を実施した日・場所・参加者数を記載してください。</p> <table border="1"> <tr> <td>日程</td> <td>令和 8 年 1 月 9 日</td> <td>参加者数</td> <td>約 48 名</td> </tr> <tr> <td>場所</td> <td colspan="3">北鶴橋小学校</td> </tr> </table>				日程	令和 8 年 1 月 9 日	参加者数	約 48 名	場所	北鶴橋小学校		
日程	令和 8 年 1 月 9 日	参加者数	約 48 名										
場所	北鶴橋小学校												

	参加者数	備考	対面とオンラインのハイブリッド形式
--	------	----	-------------------

6	成果・課題	<p>大阪市教育振興基本計画に示されている、「<u>子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力</u>」の育成および「<u>教員の資質や指導力</u>」の向上について、申請書に記載した検証方法から得られた結果と、それらからの結果に基づいた考察を、具体的に記載してください。</p>
		<p><b>【見込まれる成果1】</b></p> <p><input type="checkbox"/> 「子どもが心豊かに力強く生き抜き未来を切り拓く力」の育成</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 「教員の資質や指導力」の向上</p> <p>外部研修への参加によって最新の情報を得たり、知識を深めたりできるとともに、Teamsの活用等を通して学びの協働を行うことで、チームとしての指導力の向上につなげることができる。</p> <p>外部講師を招いた授業研究や事例検討研修会を行うことにより、担当者間のCollaborative learningにつなげることができ、互いの指導力の向上につなげることができる。</p> <p>《検証方法》</p> <p>研究員の保護者に向けた授業アンケートの  「通級担当者は、児童の行動観察やアセスメントなどをもとに児童理解に努め、実態に応じた指導をしている」「通級指導教室に通うことで、できるようになったことが増えた」の2項目における肯定的な回答の割合が8割以上になる。</p>
		<p>[検証結果と考察]</p> <p>授業アンケートでは肯定的な回答が8割以上であり、成果があった。多くの専門的な外部研修を受け作成したレポートをもとにTeamsの活用を通して学びあい指導力につなぐことができたといえる。昨年に引き続き「WISC V」「2E」についての研鑽に務めた研究員が多かった。医療機関などから共有される神経心理学的検査にはWISC Vが増えてきており、共有した結果をアセスメントして指導につなぐためのスキルが向上したといえる。児童観察に加え客観的な指標を加えてアセスメントができることは的確な指導の力を高める。</p> <p>また、通級に通う外国の子どもたちの課題を捉えるために、非言語による神経心理学的検査のバッテリーを組み検証をし、全国LD学会第でポスター発表を行った。講師からうけた助言も参考に今後も共同作業による更なる検証結果を共有することで外国の子どもへの指導に役立てていきたい。</p> <p>また、吃音の子どもたちが交流する「吃音グループ学習」も今年で3年目を迎えた。研究員がそれぞれのスキルを発揮し高めあうことでCollaborative learningにつなげた。</p>
		<p><b>【見込まれる成果2】</b></p> <p><input type="checkbox"/> 「子どもが心豊かに力強く生き抜き未来を切り拓く力」の育成</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 「教員の資質や指導力」の向上</p> <p>他校通級研修の中の実技研修や事例検討研修をオープン化することにより、参加者の通級指導教室の専門的な指導実践力を高めることができ、計画的な設置を行っている自校通級指導教室の担当者の育成を図ることができる。</p> <p>《検証方法》</p> <p>オープン研修参加者アンケートの  「オープン研修を通して通級指導教室の指導についての知識を高めることができましたか」の項目における肯定的な割合が8割以上になる。</p>
		<p>[検証結果と考察]</p> <p>オープン研修参加者アンケートでの肯定的な意見は10割であり、成果があった。</p> <p>①「2Eの子どもたちの実際と支援の進め方」のオープン講演会では自校通級の担当の先生方だけにとどまらず多くの先生方に参加してもらえた。Twice Exceptional才能と発達障害を併せ持つ児童について知ってもらえる良い機会となった。</p> <p>②「吃音症の概要と子どもへの支援について」のオープン講演会では他校通級、自校通級の教員だけでなく吃音の子どもをもつ保護者や学生にも参加をしてもらえた。吃音をもつ児童とどのようにかかわっていくか、どのような言葉がけが本人をさらに追い詰めるのかといった実践的な内容となった。100人に一人といわれる吃音症、どの学校にもいてもおかしくないが専門的な研修は数少ない。今回は非常に貴重な機会となった。</p> <p>③「外国の子どもへの発達検査の可能性について～非言語による神経心理学的検査のバッテリー～」通級に通う外国の子どもたちの課題が日本語のリミットにあるのか発達の特徴によるものなのか検証を行いオープン化して発表した。講師による助言をいただくことでさらに多角的な検証に近づけることができた。外国の子どもたちのこういった課題は今多くの学校で喫緊のものといえる。多くの先生の指導実践の力を高めることができたといえる。</p>
<p><b>【見込まれる成果3】</b></p> <p><input type="checkbox"/> 「子どもが心豊かに力強く生き抜き未来を切り拓く力」の育成</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 「教員の資質や指導力」の向上</p> <p>通級指導教室Virtual職員室の構築により、教材の共有や情報や知識の共有を効率的に行えるようになり、横の連携を高めることができ、働き方改革と授業力向上の両立につなげることができる。</p> <p>《検証方法》</p> <p>教員アンケートの  「通級指導教室Virtual職員室（Teamsの通級指導教室チーム）による情報や教材の共有は通級指導教室での指導において効果的だと思いますか」の項目における肯定的な回答をする割合が8割以上になる。</p> <p>[検証結果と考察]</p>		

		<p>教員アンケートでは、肯定的な回答の割合が10割で成果があったといえる。他校通級の担当者はそれぞれ違う学校に拠点を置くので、通級指導教室Virtual職員室を構築してTeamsを使い打ち合わせをおこなったり、教材や実践事例、研修報告を共有したりできたことは非常に有効であった。講演会もオンラインで会場と受講者、講師をつなぐことで多くの先生方や関係者に気軽に参加してもらえることができた。PPなどの資料も共同編集することができ、またFormsのアンケート機能は指導者だけでなく保護者にも使いやすく簡単に集計もでき、働き方改革につなぐことができた。</p>
--	--	--

6	成果・課題	<p><b>【見込まれる成果4】</b></p> <p><input type="checkbox"/> 「子どもが心豊かに力強く生き抜き未来を切り拓く力」の育成</p> <p><input type="checkbox"/> 「教員の資質や指導力」の向上</p>
		<p>《検証方法》</p> <p>[検証結果と考察]</p>

6	研究全体を通じた成果と課題	<p><b>【研究全体を通じた成果と課題】</b> 研究発表会等で使用した資料や研究冊子から引用し、端的に記述してください。</p>
		<p>1. 新規研究（1年目） ※継続研究2年目以降は1年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>たくさんの外部研修へ参加し、その情報や成果を共有することができ、通級担当者としてのスキルを向上させることができた。外部研修で得た情報やスキルを、他校通級研修会を通したりTeamsを活用することで共有した。場所や時間にあまり制限されずに効率よく共有できたことは大きな成果であった。また、外部講師を招いての事例検討会やオープン研修などは、自校・他校を問わず担当者の専門性を育てることにつながったといえる。</p> <p>今回の取り組みでさらに深めたいこととして「算数障害」「吃音症と医療の連携」「外国籍の子どもの発達視点からのとらえ方」などがあがっている。</p> <p>私たちは、これまで培った専門性をさらに深め、子どもを発達の視点でとらえ導くことのできる通級指導教室の担当者として切磋琢磨していくことが課題である。</p>
		<p>2. 継続研究（2年目） ※継続研究3年目の場合は、2年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>昨年度同様外部への研修会への参加とそこでの学びの聴き合いを互いの指導力のスキルを向上させることができた。また、外部講師を招いての「算数障害」についてのオープン研修会は研究員だけでなく、大阪市全体のニーズも高かったようで多数の参加申し込みがあった。また、参加者からも「算数障害の知識が深まった」「児童への支援に対して改めて考えさせられることがあった」という意見があり、研究成果を大阪市全体的に還元することができた。日本語指導を必要とする児童の増加という今日的課題をテーマに「ことばの問題と発達障害について（アセスメントの方法の検証）」をテーマにした研修を行いたい。また、ことばに関する指導のエキスパートとしての役割を果たすためにも「吃音の指導講習会」「流暢性形成法」についての研修会も行っていきたい。</p>
		<p>3. 継続研究（3年目）</p> <p>本研究も3年目に入りメンバーに自校通級の研究員も加わり裾野を広げることができた。年間を通して様々な専門的な外部研修に参加しその結果を共有した。外部講師を招いて講演会や研究会も行った。その度に大阪市の多くの自校通級担当者の参加もあり、専門性の育成に寄与することができたと思う。特に今年度は以下のように、外国の子どもの課題の原因が日本語のリミットなのか発達の特徴なのかの検証に取り組み、研究発表を行った。</p> <p>学習に困難を示す外国人児童について、非言語によるアセスメントバッテリーを組んで実施し、非言語性のアセスメントにより、学習困難の認知的要因をある程度明らかにすることができた。また、個人内の強みが明らかになり、支援方略を立てる際に有用な情報を得ることができた。被験者の多くは、日本語の語彙力が3歳未満なので日本語を使用するWISC-IVなどの発達検査では正確な認知特性を測定することは困難であると考えられ、非言語による神経心理学的検査を用いたのは妥当であった。</p> <p>3年間の研究により、通級指導教室の担当者の専門性を全市に広げることができたと思う。これからはすべての子どもたちに寄り添い、少しでも生きやすくなる様、たゆまぬ努力を続けていきたい。</p>
		<p>《代表校園長の総評》</p>
		<p>1. 新規研究（1年目） ※継続研究2年目以降は1年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>通級指導教室の計画的な設置や他校通級指導教室の世代交代も含め、通級指導教室担当者の育成は大阪市内における喫緊の課題であると思う。本年度より、通級指導教室連絡協議会の事務局も大阪市教育委員会インクルーシブ教育担当が担うことになり、その役割も大きくなってきている。そんな中で、他校通級指導教室担当者が主体となって協働体制でスキルを高めあえるシステム作りやこれまで培ってきた専門的な指導技術や知識の伝承による後進の担当者育成、「個別最適化した学び」の推進の中、日々進化している指導技術や検査等の情報を個で学ぶには限界があり、Collaborative learningの研究は、方改革の面からみてもとても効果的な研究であると思う。この研究により、通級指導に対する全市展開が促進されるとともに、これからの通級指導教室を担う人材育成に有効な研究だと思う。</p>
		<p>2. 継続研究（2年目） ※継続研究3年目の場合は、2年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>令和8年度には通級指導教室が全校設置されることもあり、本研究は大阪市全体の教育活動の喫緊的な課題であると思う。現場を熟知し、先駆者である他校通級担当者から発信された研修を全市に広めることは非常に有意義な研修活動になると考えられる。次世代の担い手を育成する上でも、本研究は大阪市としても必要な研究であり、研究意義も高いと思う。</p>
		<p>3. 継続研究（3年目）</p>

		<p>大阪市の小学校においては、どの学校も外国につながりのある児童の転入が相次いでいる実態がある。受け入れる学校現場として、まずは個別に日本語指導を行う。しかし、ある程度の回数をこなしても習得が厳しかったり、学校生活についてこれない現状もしばしば見られる。この際、発達検査などでその児童の状況や困りごとを知りたくても、日本語が壁になり実施不可能な状態となっていることが多いと感じる。そこに注目した今回の研究は、非言語による検査を行い実態把握を行うことを手段としているところである。研究の成果を本研究発表会のみならず全市に発信し、外国につながりのある児童の見取りに困っている学校で活用できる有効な研究であるといえる。</p>
--	--	---